



平成 30 年度

事務所だより 第 6 号

平成 31 年 3 月 8 日
益田教育事務所



評 価 考

学校教育スタッフ企画幹 林 衛

S N S 上に掲載された記事に読者が意見を寄せる、いわゆるツイートが賑やかだ。さらに、その意見に対して多くの者が「いいね！」などのボタンで反応する。評価が日常的に行われる時代だ。

学校で行われる評価には「学校評価」などもあるが、一般的には、児童生徒の「学習評価」をさすことが多い。そして、学習の取組状況や単元テスト、学力調査などを通して、児童生徒の学習等の状況を教師が把握することが中心となっている。

学習評価の役割は、本来、子どもの状況を把握するだけでなく、それを受けて、教師自身が授業の進め方を見直したり、個に応じた指導の充実を図ったりすることである。「この子が間違えたのは自分の指導のどこに問題があったのだろう」と分析し、「この子は漢字の書き取りが不十分だから、個別に声かけをして練習させよう。そして、次の授業でクラス全体にも注意を促そう」といったところまで考え実行して、評価になるのである。

先日、『テストだらけにしないで、教えてよ』という記事（内外教育 2019 年 1 月 25 日号）を目にした。テストの時間が増えることで授業時数が少なくなり、結果として授業の進度が速くなるというのである。児童生徒にとっては、じっくり教えてもらう間もなくテストを受けさせられ、教師は指導を見直すことなくどんどん先に進めていく感じである。

「評定あって、評価なし」という言葉を聞かれたことがあるだろう。「評定」は、学習の成果（成績）を測定し数値化することであり、それだけで評価ではない。評価を指導に生かして、はじめて「評価」となるのである。これが「指導と評価の一体化」ということになる。測定や評定ばかりを繰り返すだけで指導に繋げない教師は、検査を繰り返すが治療に入らない医者のような気がする。ましてや、学力調査の結果を順位付けして使ったり、通知票の結果をプレゼントの購入基準に利用したりする風潮は考えものである。

このほど、中央教育審議会の教育課程部会が『児童生徒の学習評価の在り方について』の報告をまとめた。そこでは、「学習評価の改善を、教育課程や学習・指導の改善に発展・展開させ、授業改善及び組織運営の改善に向けた学校教育全体のサイクルに位置付けていくことが必要」とし、学習評価をカリキュラム・マネジメントに位置付けることの必要性について言及している。各学校では、来年度の教育課程の編成に合わせ、適切な学習評価の在り方について、校内で共通理解し、体制を整えていただきたい。



子どもの姿から学びの場を考える ～益田市就学相談会から～

益田市教育委員会 派遣指導主事 小石伸江

益田市教育委員会は、幼児期から学童期へのシームレスな接続をめざし、小学校・特別支援学校小学部入学の2年前から、保護者・幼児の所属機関・益田市子ども家庭支援課をはじめ、学校、福祉関係機関、医療関係機関と連携した就学相談会を行っています。

年中児

益田市就学相談会（年中児）

【内容】相談対応者が、幼児の所属機関に出かけて行動観察を行い、所属機関の職員や保護者と子どもの姿について共通理解をし、学びの場に関する情報共有をする。

【相談者】益田市教育支援委員会で、「多様な学びの場」についての審議が必要と思われる幼児の保護者

【実施時期】10月～1月

★相談対応者がチームで子どもの様子を把握します。
★子どもの社会性の発達を見るために、集団生活の場での姿を見取ります。

益田市就学相談会（年中児）を受けた保護者の小学校・特別支援学校小学部の見学

【見学実施時期】1月～2月【見学場所】該当児の就学予定先

年長児

益田市就学相談会（年長児）1

【内容】相談対応者が、幼児の所属機関に出かけて行動観察を行い、所属機関の職員・保護者と子どもの姿について共通理解をし、就学時健康診断時の配慮や子どもに合った学びの場について話し合ったり、必要に応じて教育支援委員会審議について説明したりする。

【相談者】就学時健康診断で個別の支援を必要とすると思われる幼児の保護者

【実施時期】7月～9月



小学校の就学相談担当や特別支援教育コーディネーターの先生方、益田養護学校小学部の先生方には、強力な協力をいただいています！！

就学時健康診断 10月

益田市就学相談会（年長児）2

【内容】就学時健康診断において必要と判断した幼児（知的発達スクリーニング検査結果による）のうち希望する保護者に対して、相談対応者が、所属機関の職員・保護者と子どもの姿について共通理解をし、小学校入学後の支援体制について話し合う。

【実施時期】11月～2月

各小学校独自の就学前相談会



小学校・特別支援学校小学部入学



全ての子どもたちが自分に合った学びの場で学習できるよう、「困難さの有る無しにかかわらず、全ての子どもたちが、可能な限り同じ場で共に学ぶことを追求すること」と「困難さのある幼児・児童・生徒に対して、その人なりの自立と社会参加をめざして、多様な学びができる環境を設けること」の二つの視点から就学支援を進めていくことを大切にしましょう。

子どもと大人のまちづくり

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 谷上 元織

ここ数年、中高生の地域貢献活動がクローズアップされ、新聞等の報道で目にする機会が増えました。そんな中、地域の大人と一緒に活躍する小学生の姿を紹介します。学校教育と社会教育の有機的なつながりが生んだ実践です。

その舞台は、益田小学校。6年生が、総合的な学習の時間で「益田をもっと幸せなまちにしよう」というテーマに取り組みました。まず、市役所の職員から、まちづくりについての話を聞きました。そこで生まれた疑問に対して、市役所や公民館の職員との対話を通して、解決のヒントを得ていきます。さらに自分たちで調べたり、話し合ったりしながら学習を進め、益田のまちをより良くするための方法を「4つの提案」としてまとめました。単元のクライマックスは、「4つの提案」の発信です。11月の学習発表会で、保護者や地域の方に向けて「4つの提案」が、発表されました。

これだけでも充実した取組です。しかし、これで終わらないところが、この取組の特筆すべき点です。子どもたちからの提案を実現するプロジェクトが地域活動として生まれたのです。それは、自分たちで創りあげた提案を、

学習発表会で真剣に語る子どもたちに心を動かされた、公民館の方のはじめの一步から始まりました。子どもたちの想いを地域で実現させるための作戦会議が開かれたのです。これまで前例のない、勇気ある一步です。これまで子どもたちの学習を見守り、子どもの姿で学校の先生方と語り合ってきた公民館職員だからこそ踏み出せた一步です。そして、その一步は、地域の方々の共感を生み出し、子どもたちの想いの実現に向けた地域活動につながったのです。



具体的には、公民館で休日に計3回の活動プログラムが組まれました。教育課程外の活動ですので、子どもたちの参加は自由です。しかし、学校の先生方も子どもたちの背中を押してくださり、学年の半数近くの子どもたちが自分たちの提案の実現に向けて、プロジェクトメンバーとなり、地域の方と協働することになりました。関

わる大人も多様です。これまで子どもたちの活動に長年関わってきた地域の高齢者、保護者世代の有志、近隣の大学生など、様々な世代や立場の方がプロジェクトに参画されました。そして、見事に子どもたちの「4つの提案」は、実現しました。

「実現できるとは思っていなかった。これからもあきらめずに、自分たちでできることを中学生になっても作っていきたい。」という子どもの言葉からは、学びが実社会や生活とつながることへの喜びや醍醐味を感じます。また、「子どもたちのやろうとする気持ちに感動した。素晴らしい活動だと思う。子どもにもまちのことにどんどん関わって欲しいし、大人もその姿を見習わなくちゃいけないと思う」という感想に、子どもに関わる大人の価値観の変化を感じます。

学校と地域の学びを往還させることで、子どもたちの「やりたい」を実現させ、関わった方の価値観を変えた益田小学校区取組。まさに「社会に開かれた教育課程」が具現化された姿のひとつだと言えるのではないのでしょうか。

【4つの提案】

- ① 地域の大人と子どもがつながろう
～満天青空レストラン～
- ② まちの環境をよくしよう
～リサイクルイベント～
- ③ 手をとりあい、
世代をこえておしゃべりしよう
～茶話会・昔遊び・カタリ場～
- ④ 益田の特産物を広めよう
～特産物を使った料理コンテスト～